

## ヴェーダ時代のサラスヴァティー河をめぐって

後藤 敏文 東北大学大学院文学研究科

山田 智輝 東北大学大学院

永ノ尾 信悟 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

カーブルの峠を越えてインド亜大陸に進出した「アーリヤ」系諸部族は、当然、インダス (Sindhu) 河川群の上流域を活動領域としたはずである。しかし、後々まで彼らの意識にはサラスヴァティー河がインドにおける彼らの「故郷」であり続ける。

最古の『リグヴェーダ』(前 1200 年頃編集固定を見たと考えられる)においては、本来の活動域は、理念の上、インド進出以前の、急峻な山岳を前に草原が広がる高原地帯に置かれていた。アフガニスタンを中心に、牛、馬、羊、山羊を遊牧する移動生活に、大麦栽培を伴う定住期をまじえた生活が彼らの舞台に想定されている。現在のアフガニスタン、おそらく、マルギアーナ (アケメネス朝ペルシャの碑文では Marguš, 現在の Merv を中心)、アレイア (同 Haraiva, 現在の Herāt を中心)、バクトリア (Baktriš, 現在の Balkh)、さらに、南はアラコースィア (Harauvatiš, 現在の Kandahar を中心)、北はオクソス河 (Oxus, Amu Daryā) からアラル海にかけての地方 (オクソスがアラル海に注ぐ多河地帯がコワレズミー、Xuvarazmiš である) が問題になる。マルギアーナ、バクトリアの地域は、前 3000 年紀から BMAC (バクトリア・マルギアーナ考古複合) が栄えた地帯であり、前 2000 年頃にはインド・イラン共通時代の人々がこれに遭遇し、大きな影響を受けたものと推定される。それなしには、社会制度の神々であるリグヴェーダのアーディッテャ神群 (アスラたち)、従って、これに基礎を置くと考えられるゾロアスターのアフラ・マズダーも、ソーマ (ハオマ) も、インドラという神名も無かったものと思われる。アレイアはゾロアスター教の開祖 Zaratuštra が活動を開始した地域と推定され、ゾロアスター教初期の活動域はアレイア、マルギアーナ、バクトリアを結ぶ三角地帯に求められる。ゾロアスターの年代は、教団自体の伝承では前 600 前後とされることが多いが、キュロス 2 世 (前 559-530 年) に始まるアケメネス (ハカーマニシュ) 朝ペルシャとの関係からは遅すぎる想定である。ゾロアスター教はアケメネス朝の国教とされ、ペルシャのイスタッフル (シーラーズ、ペルセポリスの西南方) にメディア出身の僧侶の拠点があった。ダリウスの王宮には、アラコースィアの僧団とメディアの僧団とが伺候していた。アケメネス朝以前に遡るバクトリア出土の金の飾り板 (「オクソスの秘宝」、前 7-6 世紀) には、ペルシャの武人、メディアの僧または武人が描かれ、後者は祭式に必須の干し草の束を手に行っている。干し草の束は *barašman-* と呼ばれ、インドの *barhī-* である<sup>(註1)</sup>。

後のゾロアスター教では金属の束に置き換えられた。干し草の他に小枝もあるのではないかと想像されるが、未だ確かめていない。教団の伝承は、むしろ、メディアの僧団とそれを支えるアケメネス朝の権威にゾロアスターの年代を合わせた結果ではないかと想像される。こうした事情から、ゾロアスターの年代はより古く、前 1000-800 年に置かれることが多い。しかし、言語の相対年代からは、さらに古い年代が示唆される。ゾロアスター自身のことばを含むと考



W. PFEIFFER によるアケメネス朝ペルシャの図 (A. CHRISTENSEN Die Iranier Kulturgeschichte des alten Orients, III-2, Handbuch der Altertums- wissenschaft, München 1933 より)

えられる古アヴェスタ語は、リグヴェーダより幾分古い傾向を示し、インド・イラン共通時代の要素をより多く残すからである。いずれにしても、リグヴェーダの理念上の舞台は、ゾロアスターが活動した時代と領域とに近接するか重なる。文法上の特色の中にも、アヴェスタ語とリグヴェーダの近さを示唆する要素がある：男性 *-a-* 語幹複数主格形 *-āsas* (中期インドアーリヤ語のパーリ語にも)、強い *r* 方言 (アヴェスタ語には *l* は無く、インド側ではリグヴェーダが最も強い *r* 傾向を示す)、語末の *\*-as > -o* (語中では *\*-as > -e*。インド、イランの周辺方言には語末にもこの変化が多く残る)。

アラコースィアのイラン名、古ペルシャ語 *Harauvatiš* (新アヴェスタ語には現地の方言要素を反映する *harax<sup>v</sup>āti-* が現れる) はリグヴェーダ以来インドの聖なる川サラスヴァティー *Sárasvatī* と同じ語に遡り、「湖、池を持つ (川)」の普通名詞から出たものと思われる。アレイアの古ペルシャ語名 *Haraiva-* にはリグヴェーダに知られる河川名 *Saráyū-* がほぼ対応し、これと、新アヴェスタ語、単数対格形 *Harōiium*、さらに派生形容詞 *hārōiū-* 「H 出身の」からインド・イラン祖語 *\*saraiju-* が復元できる。語源は *\*sar* 「走 (りだす)」または、*Sárasvatī-* に見られるような湖沼、湿原に関わる語彙を背景に持つと考えられ、いずれにしてもハームーン湖 (サーサーン朝時代にゾロアスター教の聖地の一つとされた。最近枯渇したとも聞く) に流れ込む河川名が基であろう。 *Xās-Rūd* は新アヴェスタ語に *Xāstrā* 「良い居住地を持つ (川)」の名で現れ、その南には Helmand 川がある。現在イラン、アフガニスタンに跨る同地域はスイースターンと呼ばれるが、サーサーン朝碑文にサカスターン (*skst'n*, パフレヴィー *Sakistān*, *Sayistān*) として見え、「サカ族 (ス

キュタイ)の土地」の意味である。

このような、インド・イラン共通時代に遡る言語遺産、生活を保ちながら、ヒンドウークシュ山脈を越えてインドの地に入った人々が先ず進出したのはインダス河川群の上流地帯であったはずであり、リグヴェーダに、実際、しばしばスィンドウ (*Sindhu*、複数 *Sindhavah*) として言及される。そのイラン語形が *Hindu* (新アヴェスタ語 *Həndu*、*Hapta Həndu* 「7つのヒンドウ」、ともに「インド」を意味すると思われる；古ペルシャ語 *Hi<sub>h</sub>du*：アケメネス朝支配下のインド地域) である。*Indos*、*Indus* は、これから、語頭の *b* を失う小アジアのイオニア方言経由でヨーロッパ諸語に入ったものであろう。それぞれの言語に対応する漢語表現が、身毒、身豆、真定など、賢豆、乾特、臬度などとその異形に基づく (?) 天竺、天毒、天豆など、印度、印土などである。Witzel は各地に同起源の地名が現れるとして、「川」を意味した *Substrat*、おそらくは *BMAC* 起源の語と見ているようである。

アーリヤの人々は何故インダスまたはその支流のどれかではなく、サラスヴァティーを彼らのインドにおける「故郷」と考えたのであろうか。アーリヤ人の進出は前 1500 年頃以降、部族単位、家族単位で、西方から押し出されるような形で順次なされたものと思われる。インダス河川域には、当然インダス文明の諸都市諸村落があったはずである。リグヴェーダ編集期(前 1200 年頃か)以降、各部族は各方角へ展開するが、主要な流れはガンジス北側の比較的乾燥した丘陵地帯沿いに東へ向かい、その一派は数百年後には東インドのミティラー地方に一大国を建設する。その因縁譚を E-3 に紹介する。

サラスヴァティー川が当時どのように流れていたかについては他グループの成果を待ちたい。サラスヴァティーもインダスの東側に沿う形で存在する。アーリヤの人々は特別な文明の道具を持たず、牛中心の遊牧生活を行っていた。考古学的に遺るものも殆どもっていなかったであろう。戦車の出土は見込まれるが、戦車は他から調達するか、引き連れていた異部族の専門家に作らせていたものと思われる。ヴェーダ文献からは、祭式の時だけに用いる火鉢、搾乳用の受け皿について、彼ら自身による原始的な製法が知られるが、他方、日常的には異部族に作らせたものを用いていたことが解る(「アスラの」、「シュードラに属する」)。インダスの先進文化を出来るだけ避けてインド内部に進出する過程で、サラスヴァティー流域を独占的に確保し得たことが、その後のアーリヤたちの拡大の基礎となり、サラスヴァティーの聖地化へと連なったとも考えられる。最古の文献資料を精査して、一つ一つ事実を確認して行く必要がある。現在まで積み重ねられてきた文献研究の基礎作業は新たな検討を可能にする段階に達した。そのような試みの第一歩として、ここには山田智輝氏による『リグヴェーダ』サラスヴァティー讃歌の研究の一部を E-1 に収録する。サラスヴァティーに関する他の 2 讃歌も同様の研究を終えており、次に、他の讃歌中に言及されるサラスヴァティー、他の河川への言及、スィンドウへの言及の検討へと根気のいる調査が進む。E-2 には、永ノ尾信悟氏の「サラスヴァティーの合宿」という名の儀礼研究について発表された英語論文の主旨を再録した。Hertha KRICK, *Das Ritual der Feuergründung (Agnýādheya)* 1982, p.498、特に注 1345、Harry FALK, *Bulletin d'études indiennes* 6 (1988) p. 234, p.250 n.24 が解釈するような牛の略奪行を合意する儀礼ではなく、肥沃なサラスヴァティー河に沿って遊牧を模した繁栄儀礼であるとする。くびき(軛)をながえ(軛)に固定する木製の楔 (*sámyā*) を投げたり、弓で射たりする祭式行為は他にもしばしば見られるが、往事の実際の旅程を象徴的に模倣する儀礼行為とも考えられる。儀礼が成立した当時と儀礼記録時との間には、生活条件に大きな開きが想定される。その間の生産、生活、儀礼、解釈の変

化を吟味して、歴史的に跡づける必要がある。リグヴェーダに見られる「牛探し」 *gāviṣṭi-* は季節的に行われる遠征、戦争である。そのための基礎資料として、永ノ尾氏による儀礼文献に現れるサラスヴァティーについての初めての詳細な研究は重要である。解明は近い将来の課題として残されるが、古い段階から迫る山田論文とより新しい展開から見た永ノ尾論文とは互いに補うものである。

(後藤 敏文)

E-1

『リグヴェーダ』サラスヴァティー讃歌 VI 61 の研究

山田 智輝

リグヴェーダ VI 61: 詩人 Bharadvāja、神格 Sarasvatī、韻律：1-3 jagatī (12-12-12-12), 4-12 gāyatrī (8-8-8), 13 jagatī, 14 triṣṭubh (11-11-11-11)。

Sarasvatī はリグヴェーダ (Rgveda、以下 RV) に 3 篇の単独の讃歌 (VI 61, VII 95 及び 96<sup>(註2)</sup>) を有し、数ある河川の中でも特別な存在として位置付けられている。Sarasvatī 川は現在既に大部分が涸渇しており、Ghaggar 川、Hakra 川にその痕跡を留めるのみであるが、RV では山岳地帯を流れて海へと注ぐ大河として描かれる。またブラーフマナ諸文献にはその河岸部の遡上を模倣した *sattra* 祭 (祭官だけで行う長期間のソーマ祭。その後で多くの牛が得られるので、一種の作戦行動とも考えられる。祭式に関わる讃歌の制作やその解釈、問答による錬成会のような性格も想像される) の一バリエーション<sup>(註3)</sup> が伝承されており、祭式とも深く関連付けられていた。この讃歌は、河川 Sarasvatī の水を湛える往時の姿や、インド・アーリヤ人のインド亜大陸西北地方から東方への移動の軌跡、さらにはその過程で遭遇した非アーリヤ系先住民との闘争の様子など、数多くの興味深い情報を記録している。

1 *iyám adadād rabhasám ṛṇacyútam*  
*divodāsam vadhryaśvāya dāśūse |*  
*yāśāsvantam ācakhādāvasám paṇim*  
*tā te dātrāṇi taviṣā sarasvati ||*

彼女は強力な、負債を取り立てる<sup>(註4)</sup> Divodāsa<sup>(註5)</sup> を、  
 敬虔な Vadhryaśva<sup>(註6)</sup> に与えた、  
 次々と [現れる]<sup>(註7)</sup> Paṇi<sup>(註8)</sup> から [旅路の] 糧を奪い取った彼女は。  
 それら (牛たち) は君への強力な贈り物である、Sarasvatī よ。

[解説 1]

Paṇi から牛を略奪することに成功した Vadhryaśva, Divodāsa の一団は、その功績の所在を

Sarasvatī に帰し、彼女を賞讃している。c「次々と [現れる] Paṇi」は、KLINGENSCHMITT “Altindisch *śásvat-*” (註<sup>9</sup>) が明らかにした *śásvant-* の「連続する、持続する、途切れのない列、組を構成する」という基本的語義により、正しい解釈が可能となる。具体的には「次々と眼前に現れる Paṇi 達から順次奪い取った」という意味で、ここからは詩人達の一団が移動の過程で遭遇した素性の知れない諸々の異部族を「Paṇi」と総称していたという可能性が読み取れる。

Divodāsa は RV では比較的頻繁に登場し、特に VII 18,26 では十王戦争の勝利者として知られる Bharata 族の Sudās の父として語られる (註<sup>10</sup>)。一方 Vadhryśva は RV では当箇所と X 69 に現れる。そこでは彼の名を冠する祭火が登場するが、そこでは彼の素性については語られない。GELDNER は当箇所を典拠に Vadhryśva と Divodāsa に親子関係を認めている (註<sup>11</sup>)。この解釈は恐らく動詞語根 *dā* の「人を (acc.) 人に (dat.) 息子として与える」という用法に依拠したものであるが、dat. で語られる人物は必ずしも「息子」に限定される必要はなく (註<sup>12</sup>)、当箇所の場合は「勇者として」とも解釈できる。この境界は流動的であるとしても、両者の祭官と武人の関係をいうものとも解釈できる。

2 *iyám śúsmebbhir bisakhá ivārujat*  
*sānu girinām tavisébbhir ūrmibhiḥ |*  
*pārāvataḡhnīm āvase suvr̥ktibhiḥ*  
*sārasvatīm ā vivāsema dhītibhiḥ ||*

彼女は鼻息たちによって、蓮根を掘り起こす者 (イノシシ) (註<sup>13</sup>) のように破った、  
山々の背を強力な波たちによって。

遠くに [ある] 者達 (註<sup>14</sup>) を打ち殺す Sarasvatī を、助けのために、  
良い讃唱たちによって、我々は勝ち得ることを望みたい (註<sup>15</sup>)、思慮たちによって。

## [解説 2]

a, b では Sarasvatī 川が山々を激しく浸食する溪流として描かれている。*pārāvata-* は *parāvāt-* 「あちら側、遠い土地、行ったっきりの場所、最果ての土地」からの派生語で、「あちら側、埒外に住む者達」を意味する。ここでは詩人がその者達を打ち殺すという Sarasvatī に加勢を求めていることから (c「助けのために」)、Sarasvatī 川付近に拠点を構える敵対部族を指すと考えられるが、PB IX 4,11 では *pārāvata-* が河川付近の住民について用いられている点を考慮すると、ここでも「川向こうの人々」を意味している可能性もある (註<sup>16</sup>)。

3 *sārasvati devanīdo nī barhaya*  
*prajāṃ vīsvasya bṛsayaṣya māyīnaḥ |*  
*utā kṣitibhyo 'vānīr avindo*  
*viśám ebhyo asravo vājīnīvati ||*

Sarasvatī よ、君は神々を非難する者達を叩き潰せ、  
策略に富む (註<sup>17</sup>) あらゆる Bṛsaya の子孫を。  
君は一族の者達のために河床たちを見つけ出した。

且つまた彼らに毒を流した<sup>(註18)</sup>、勝利する [力] に富む女よ。

[解説 3]

詩人の一団は「Bṛsaya の子孫」と戦い、Sarasvatī 川付近に抛り所となるような土地を見定める。Bṛsaya の名は RV では当箇所と I 93,4<sup>(註19)</sup> に言及されている。その素性については不明だが、b という特殊な音と、r に後続するにもかかわらず s の音があることから (ruki の法則により ṣ が期待される)、インド・アーリヤ語起源の名前では無いことは確実である。「策略 (māyā) に富む」とあるが、māyā- は動詞語根 mā 「計る」から作られた抽象名詞で、本来は「計算・設計能力」を意味し、後になって「magic, trick, 幻」の意を強めていく<sup>(註20)</sup>。ここでは「Bṛsaya の子孫」の信用のおけない性格を言うものであるだろうが、逆に彼らの先進的文化を表しているとも解釈できる。

4 *prāno devī sárasvatī*  
*vājēbhīr vājīnīvatī |*  
*dhīnām avitry āvatu ||*

女神 Sarasvatī は我々を、  
勝利する力たちによって<sup>(註21)</sup>、勝利する [力] に富む女は、  
思慮たちの援助者は、助け進めよ<sup>(註22)</sup>。

5 *yās tvā devī sárasvaty*  
*upabrūtē dhāne hité |*  
*īndram ná vrtratrūr̥ye ||*

君に、女神 Sarasvatī よ、  
戦利品が置き定められた時に<sup>(註23)</sup>、話しかける者があれば、  
Vṛtra を凌ぐ時に Indra に、のように、

6 *t<sub>v</sub>vām devī sárasvaty*  
*āvā vājēsu vājīni |*  
*rādā pūṣēva naḥ sanīm ||*

君は、女神 Sarasvatī よ、  
(戦車) 競争たちにおいて [その者を] 助けよ、勝ち馬 (f) よ。  
Pūṣan が、のように、我々に勝利 [への道を] を拓け<sup>(註24)</sup>。

[解説 4-6]

Sarasvatī に勝利を要請する詩人の意図が見受けられる。6c で語られている Pūṣan とは家畜の群れを守る神で、巻き上げた頭髪と髭を持つ姿で描かれる。山羊が牽く戦車に乗っており、羊の毛は彼が編み出すとされる。またあらゆる道を熟知し、放牧の際に危険のない道を見つけ出

す道の守護者ともされる<sup>(註25)</sup>。これに対応するギリシア側の神格が牧羊神 Πάν (Pan、パーン)<sup>(註26)</sup>で、両者が共通の印欧祖語に遡ることが OETTINGER “Die Götter *Pūṣan*, *Pan* und das Possessivsuffix *\*-h<sub>3</sub>en*”<sup>(註27)</sup>によって証明されている。

*Pūṣan* と *Sarasvatī* は RV でしばしば並列して語られ、両者が同一の *sūkta* 内で語られている箇所は全部で 21 あるが、そのうちの約半数にあたる 10 箇所において同一もしくは連続する *rc* 内に両者の名が言及されている。RV 以降のヴェーダ文献でも両者は度々並列して言及されるが、その用例の多くは神名の羅列という形であり、両者の関係性については把握し難い<sup>(註28)</sup>。HILLEBRANDT は後代のブラーフマナで *Sarasvatī* が雌羊と関連付けられている記述 (TS II 1,2,6, ŚB XIII 2,2,4, TB II 6,15,1) を紹介し、ガンダーラ地方で継承されている羊を飼育する文化の存在と合わせて、羊や山羊によって特色付けられる *Pūṣan* との関連の根拠の一端を見出している。両者の関係について詳らかにすることは容易ではないが、RV の伝承者が *Sarasvatī* と *Pūṣan* に何らかの関連性を見出していたと考えられることは注目に値する。

7 *utá syá nah śarasvatī*  
*ghorá hīraṇyavartaniḥ |*  
*vṛtraghnī vaṣṭi sustutīm ||*

そして、例の恐ろしい、  
黄金の轍を持つ<sup>(註29)</sup>、  
障碍を打ち壊す *Sarasvatī* は、我々の良き讃えを望む、

8 *yásyā anantó áhrutas*  
*tveśás carisṇúr arṇaváh |*  
*ámaś cárati róruvat ||*

その、終わりのない、ふらつくことのない、  
激しい、動き巡る、波打つ  
その攻撃（押し寄せ）が、[繰り返し] 叫びながら進む [*Sarasvatī* は]。

[解説 7-8]

*Sarasvatī* の、多くの水を湛える急流としての姿が描かれている。7b「黄金の轍を持つ」からは、雨期の氾濫の後にもたらされる肥沃な土地の姿が想起される。遊牧民であるインド・アーリヤ人にとって、そのような土地は格好の放牧地であったと推測される。

9 *sá no vísvā áti dviśah*  
*svásr̥ anyá rtávarī |*  
*átann ábeva sūr yab ||*

かくて、我々を、あらゆる敵意たちを越えて、  
他の姉妹（河川）達を [越えて]、天理に従う彼女は展げたのだ<sup>(註30)</sup>。

太陽が日々を、のように。

[解説 9]

移動の過程で自らの部族が数々の敵達を凌駕し、幾筋もの河川を越えて拡がり得たことを、Sarasvatī の功績として讃えている。GELDNER は当箇所と I 40,7cd<sup>(註 31)</sup> の記述に、アーリヤ人の拡散に関する歴史的回想の痕跡を認めている<sup>(註 32)</sup>。他の詩節では過去時制に一貫して ipf. が用いられているのに対し、ここでは唯一 aor. (機能は「確認」と判断した) が用いられている。

10 *utá nah̄ priyá priyásu*  
*saptásvasā sújustā* |<sup>(註 33)</sup>  
*sárasvatī stóm.yā bhūt* ||

そして、好ましい女達の中で好ましい、  
七人姉妹の、大いに好まれる  
Sarasvatī は、我々に讃えられるべき者である。

[解説 10]

c の *bhūt* (*bhū* aor.inj.) は *asti* の inj. の価値、即ち *asti* が「今たまたまそうである」ことをも意味しうることを避けた、超時間的表現<sup>(註 34)</sup>と考えられる。a の *priyá-* を「好ましい」と訳したが、先行する文脈で敵対する異部族について語られていることを考慮すると、ここでは詩人達にとっての「味方、一員」<sup>(註 35)</sup> を特に意味しているとも解釈できる。b 「七人姉妹」は、Sarasvatī と並び称される他の河川或いは支流が存在していたことを言うものであろう。「7」という数字<sup>(註 36)</sup> と河川との組み合わせからは、RV で度々言及される「七河川 (*saptá síndhavaḥ*)」が連想される。河川名が多数登場することで知られる X 75 では 18 の河川名が言及されているが<sup>(註 37)</sup>、RV に河川名が 7 つ並列して語られる箇所はない。

11 *āpaprúṣī pāṛthivāny*  
*urú rájo antárikṣam* |  
*sárasvatī nidás pātu* ||

大地に属する [場所] たちを、  
幅広い空間を、中空を彼女は満たした<sup>(註 38)</sup>。  
Sarasvatī は [我々を] 非難から守れ。

12 *triṣadhástḥā saptádhātuh̄*  
*pāñca jātā vardháyantī* |  
*váje-váje háv.yā bhūt* ||

三つの居場所を持つ、七つの部分からなる [彼女は]、  
五つの子孫 (種族) たちを増大させつつ、



競争のたびに呼びかけられるべき者である<sup>(註39)</sup>。

[解説 11-12]

Sarasvatī が天空地の三界を流れる、神話的河川であることが語られている。12b「五つの子孫達 (*pāñca jātā*)」は、RV 以降数々の文献に散見される「五部族」という概念に相当するものである。他には「五つの居住地たち (*pāñca kṣitāyas*)」、「五つの境界たち (*pāñca kṛstāyas, pāñca carṣanāyas*)」、「五つの種族 VI 61 達 (*pāñca janāśas*)」等の表現が挙げられる。

この「五部族」に関しては SCHLERATH<sup>(註40)</sup> がその研究史をも含め簡潔に論じている。彼はこの場合の5という数字は「中央」にいる自らの部族とその「四方」にいるその他の諸部族を意味し、それらの五者を総合して「地上の全ての部族、全人類」を意味すると解釈する。この「全て」にはアーリヤ・非アーリヤを問わず地上の人類全体が含意されるが、文脈によってはアーリヤ人のみに限定されるとしている<sup>(註41)</sup>。他方、RV I 108,8 で並列して語られている Anu, Druhyu, Yadu, Tūrvaśa, Pūru のアーリヤの5部族が具体的にそれに該当するという見解<sup>(註42)</sup> もあり、近年では WITZEL が、RV に多数登場する王族階級部族の中で、これらの5つの部族が事実上の「五部族」として中心的役割を演じていたと指摘している<sup>(註43)</sup>。しかしこれら五つの部族が「5」という実数を以て同時に形容される用例が存在せず、またこれら以外の部族が「五部族」として語られることもあるため、これら5つの部族のみに限定することは難しいものと思われる。

当箇所解釈に戻ると、先行する文脈で非アーリヤと目される異部族との戦いの様子が語られているため、「増大させつつ」という肯定的な行為の対象となるのが、敵対部族をも含む全人類であるとは考え難い。特定のアーリヤ人の家系名も語られていないので<sup>(註44)</sup>、ここでの「五つの子孫（種族）たち」とは、「全ての味方の部族たち」程の意味で用いられていると解するのが妥当であろう。

13 *prā yá mahimná mahināsu cékite*

*dyumnébbhir anyá apásām apástamā |*

*rátha iva brhatī vibhvāne krtó-*

*pastútyā cikitúsā sárasvatī ||*

偉大さによって、偉大な [河川] たちの中で、[常に] 認識される<sup>(註45)</sup> 彼女は、天の輝きたちによって他の [河川たち] を [凌ぎ]、巧みな者達の中で最も巧みな彼女は、戦車がのように、背の高い、卓越した [者] のために<sup>(註46)</sup> 作られた [彼女] は、気付いている者によって讃えかけられるべき者である、Sarasvatī は。

[解説 13]

b, c の表現からは、工作や技術者の存在の示唆が見受けられる。印欧語族やアーリヤ人が手工業者として描かれることは稀で<sup>(註47)</sup>、彼らは基本的に自身では技術力を保持しようとはせず、必要に応じて他者から技術製品を調達していたと考えられている<sup>(註48)</sup>。ここではそのような技術を詩人達の部族に供給するような（先住）部族が、多数 Sarasvatī 河岸部で生活していたことを示唆している可能性がある。

14 *sārasvatī abhī no neṣi vāsyo*  
*māpa spharīḥ pāyasā mā na ā dhak |*  
*juśāsva naḥ sakhya veśyāca*  
*mā tvāt kṣétrāṇy āraṇāni ganma ||*

Sarasvatī よ、君は我々をより良き状態／ことへと導け。

蹴り飛ばすな（ミルクを蹴り零すな）。ミルクに関して我々を不足させるな。

我々との同盟関係たちと、部族社会たちを君は喜び迎えよ。

君から「離れた」余所の<sup>(註49)</sup> 定住地（住む場所）たちへと我々が行くことのないように<sup>(註50)</sup>。

[解説 14]

Sarasvatī 川の近くに定住することが宣言され、そこでの生活の繁栄を Sarasvatī に要請するという形で讃歌は締め括られている。「余所の定住地たち」は Sarasvatī 川付近以外の諸々の定住地を包括的に指し、詩人がこれまでに言及してきた Sarasvatī 川の近辺こそが本来の定住地であることを強調して言ったものであると考えられる<sup>(註51)</sup>。他の土地への移動を余儀なくされる事態が生じることを *mā + Inj.* によって禁止しており、この土地に対する詩人の只ならぬ思い入れが感じ取れる。

[まとめ]

この讃歌は Sarasvatī の河川としての姿を色濃く映し出していると言える。2、8 では豊富な水量を有する河川として描かれ、山々を侵食し、荒々しく流れるその姿からは枯れ果てた河川の姿は想像できない。雨期がもたらす氾濫は河岸部に肥沃な大地をもたらし（7）、羊や山羊をも含めた遊牧者達（6?）にとって格好の放牧地となった。また同時に、その河岸部は多数の人々にとって生活の拠点となっていた。1、2、3、13 では Sarasvatī 河岸部の住人について語られている。彼らからは Sarasvatī 付近で定住生活を営んでいた非アーリヤ系先住民族の姿が想像される。彼らは工芸や技術力といった、詩人達にとっては得体の知れない力を所有しており、そのような彼らの技術力を詩人達の一団も何らかの形で利用していた（2、13）。しかし Sarasvatī に勝利を要請する表現が随所に残されている点からは、詩人達とそれらの先住民達とは決して友好的な間柄では無かったことが読み取れる。数々の敵対者と遭遇し、幾筋もの河川を渡り越えて東方へと移動を続けた詩人の一団は、最終的に Sarasvatī 付近にまで辿り着き（9）、そこを定住地として選択する（14）。

E-2

サーラスヴァタ・サットラについて

永ノ尾 信悟

以下のサーラスヴァタ・サットラの概略は拙稿 “Is the Sārasvatasattra the Vedic Pilgrimage?” 『江島

惠教博士追悼記念論集『空と実在』2000、東京：春秋社、pp.607-622 にもとづいている。

### サーラスヴァタ・サットラを記述する文献

タイティリーヤ・サンヒター (TS) 7.2.1、パンチャヴィンシャ・ブラーフマナ (PB) 25.10-12、ジャイミニヤ・ブラーフマナ (JB) 2.297-299、シャーンカーヤナ・シュラウタストラ (ŚāṅkhŚS) 13.29.1-26、アーシュヴァラーヤナ ŚS (ĀśvŚS) 12.6.1-35、ラートウヤーヤナ ŚS (LāṭyŚS) 10.115.1-18.9、ドゥラーフヤーヤナ ŚS (DrāhŚS) 31.1.1-3.10、マーナヴァ ŚS (MānŚS) 9.5.4.1-25、バウダーヤナ ŚS (BaudhŚS) 16.29、アーパスタンバ ŚS (ĀpŚS) 23.12.4-13.10、ヒラニヤケーシ ŚS (HirŚS) 18.4.21-46、カートウヤーヤナ ŚS 24.5.25-6.31.

### TS, PB, JB の記述によるサーラスヴァタ・サットラの概要

- 1.1 PB 25.10.1, JB 2.297 [287.37-288.1] サラスヴァティー川が砂漠に消えるところで人々は潔斎する。
- 1.2 PB 25.10.2 潔斎とウパサド儀礼の行われる期間は2日間。
- 2.1 PB 25.10.3 アティラートラ形式のソーマ祭が行われる日に、乳搾りのため子牛たちを母牛たちから放す。
- 2.2 PB 25.10.3 そのアティラートラ祭が終了して後、搾ったミルクなどを用いてサームナーイヤ儀礼を行う。
- 3.1 PB 25.4 その後くびきピンを投げ、ガールハパティヤ祭火の位置を決め、そこから36歩のところをアーハヴァニーヤ祭火の位置とする。  
JB 2.298 [288.4] くびきピンを投げながら進んでいく。
- 3.2 TS 7.2.1.3 サダス小屋とソーマ置き車を使って、6夜祭をその後行う。ソーマ置き車とサダス小屋はアーシュヴァッタの木でできている。
- 3.3 JB 2.298 [288.3] これら二つのものに車輪が付いている。  
PB 25.10.5 これら二つのものとアークニードウラ小屋も車輪が付いている。
- 3.4 TS 7.2.1.3, PB 25.10.5, JB 2.298 [288.3] 祭柱には白が固定されている。
- 3.5 PB 25.10.5 ソーマを搾るときの反響穴を掘らない。
- 4.1 PB 25.10.6 月の満ちる半月間、新月祭を毎日行う。
- 4.2 PB 25.10.7-8 満月の日にゴーストーマ形式のソーマ祭を行い、その終了後に満月祭を行う。
- 4.3 PB 25.10.8 月の欠ける半月間、満月祭を毎日行う。
- 4.4 PB 25.10.8 新月の日にアーユシュトーマ形式のソーマ祭を行う。
- 5.1 TS 7.2.1.3 東に向かって行く。JB 2.298 [288.9] 東と北に向かって行く。
- 5.2 TS 7.2.1.4, JB 2.298 [288.7] サラスヴァティー川に沿って行く。
- 5.3 PB 25.10.12, JB 2.298 [288.8] サラスヴァティー川を遡って行く。
- 5.4 PB 25.10.12 サラスヴァティー川の東岸にそって行く。
- 5.5 TS 7.2.1.4 叫びながら行く。  
JB 2.298 [288.6] 打ち鳴らしながら、叫びながら行く。
- 6.1 PB 25.10.15 ドウリシャドヴァティー川との合流点でアパーム・ナパートへ粥を献じて、渡る。

- 7.1 PB 25.10.19 百頭の牝牛の中に種牛を放つ。
- 8.1 TS 7.2.1.4, JB 2.299 [288.22-23] 十頭の牝牛が百頭になると、このサットラの終了の一つの機会。
- 8.2 TS 7.2.1.4, PB 25.10.19, JB 2.299 [288.24] 百頭の牝牛が千頭になると、終了の一つの機会。
- 8.3 TS 7.2.1.4, PB 25.10.20 すべてを略奪されると、終了の一つの機会。
- 8.4 TS 7.2.1.4, JB 2.299 [288.22] 参加者の誰かが死ぬと、終了の一つの機会。
- 8.5 PB 25.10.20 中心人物が死ぬと、終了の一つの機会。
- 8.6 PB 25.10.21, JB 2.299 [288.22] サラスヴァティー川の源流にあるプラクシャの木に到着すると、終了の一つの機会。
- 9.1 PB 25.10.22 源流にあるプラクシャの木に到着して、アグニ・カーマに穀物祭式を行う。
- 9.2 PB 25.10.22 乳を出している牝馬と女を謝礼として与える。
- 10.1 PB 25.10.23 ヤムナー川のカーラパチャナに行き、終了の沐浴儀礼を行う。

この報告のもとになった拙稿では、題から判断できるように、サーラスヴァタ・サットラがヴェーダ時代の巡礼であったかどうかの議論に集中している。結論として、このサットラは巡礼ではないと主張した。説得力があるかどうかは問題である。

H. KRICK は彼女の *Das Ritual der Feuergründung*, 1982, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, p. 498 でサーラスヴァタ・サットラを家畜の略奪行と考えている。このサットラを終了させる一つのきっかけが、この祭式の概要の 8.3 にあるように、このサットラを行っている者たちが略奪を受けることであり、むしろ彼らは逆に略奪を恐れていると思われる。サラスヴァティー川を進んでいく様の記述の中の 5.5 で、叫びながら、またはものを打ち鳴らしながら進んでいくとある。TS 7.2.1.4 はその行為の意味を「悲惨さを他のものにくくりつけ、彼らは安泰に赴く」とする。また、JB 2.298 [288.6] は、打ち鳴らすことと叫ぶことは力の現われと解釈する。この二つの解釈は攻撃性を表すより、むしろ、防御を表現すると思われる。この点に関して BaudhŚS 16.29 [276.3] は「略奪されないことを願って彼らは叫ぶ」と短いコメントを記すが、重要な情報と思える。DrāhŚS 31.2.11 と LātyŚS 10.17.4 は「牝牛たちを危険のないところで守るべし」と言い、略奪をまぬかれる配慮をしているといえるが、積極的に略奪行であることを示す記述はないと思う。

この報告のもとになった拙稿において、このサットラの目的を、肥沃なサラスヴァティー川にそっておこなわれる遊牧の儀礼化であると主張した。7.1 にあげた PB 25.10.19 では百頭の牝牛のなかに種牛を放つとある。そして、終了する契機の第 1 にあげられるのが、8.1 と 8.2 にあげた、牝牛が十頭から百頭へ、または百頭が千頭へと 10 倍に増えることとある。根拠としてはこの一つしかあげることができない。KRICK は、この牝牛の数の増大を根拠に家畜の略奪とするが、種牛を放って、物音をたて、ゆっくりと、くびきピンを投げた距離だけ進んでいくという進み方はどうしても隠密さとスピードを必要とすると思われる略奪行とはとても思えない。DrāhŚS 31.2.12 と LātyŚS 10.17.5 は「それら（牝牛たち）の牡とバターを食べるべし」というが、「それらの牡」とは牝牛に生まれた牡の子牛であるように思える。

したがって、本報告者は、このサーラスヴァタ・サットラはサラスヴァティー川にそって行われる遊牧を儀礼的におこなうものであると考えている。

E-3

部族の火の東進 — 『ヴェーダ』の神話、儀礼と  
その歴史的背景<sup>(註52)</sup>

後藤 敏文

1 『シャタパタ・ブラーフマナ』I4,1,10-20 の記載

『シャタパタ・ブラーフマナ』I4,1,10-20 は、ジャナカ王とヤージュニャヴァルキヤによって知られるヴィデーハ国建設にまつわる古譚を記録する。先ず翻訳を以下に掲げる。

… (10) 「液体バターにまみれた [柄杓] によって」と [唱える]。ヴィデーガ・マータヴァは皆に属する火を口 [の中] に持っていた。彼の筆頭祭官 (プローヒタ) は聖仙ゴータマ・ラーフガナであった。彼に対して、(マータヴァは)、すなわち、話しかけられても答えない、「皆に属する火が、私の口から漏れ落ちてはならない」と [考えて]。(11) 彼に讃歌によって (やむを得ず) 呼びかけることにした: 「ホートリ祭官の職を遂行する、天の [輝き] もつ、君を、見者よ、我々は燃え立たせたい、アグニ (火) よ、祭式手続きにおいて、高い [君] を、ヴィデーガよ」と。(12) 彼は答えなかった。「アグニよ、君の (清く) 輝く、(明るく) 輝く、(白く) 輝く炎たちは、光輝たちとして、立ち昇る、ヴィデーガよ」と。(13) 彼は答えようとしなかった。「そう言う君に、液体バターを背に [滴らせる] 者よ、我々は願う」と、まさにそこまでことばにした。すると、彼の中から、皆に属する火が、液体バター (という語が) 聞こえると、燃え出た。それを (ヴィデーガは) 支えることができなかった。それは彼の口からこぼれ出た。それはこの大地に達した、例の場所で。(14) その時、ヴィデーガ・マータヴァはいた、サラスヴァティー [川] のところに。それは、その場所から、東へ向かって燃えつつ、進んでいった、この大地を。ゴータマ・ラーフガナとヴィデーガ・マータヴァとは、燃えているそれに従って、あとから行った。それはこの (地上の) 一切の川たちを越えて燃えた。—サダーニーラーというのは北の山から流れ出している。—それを (火は) 越えて燃えなかった。そういうその [川] を、以前は、婆羅門たちは渡らないものだった、「皆に属する火によって、(この川は) 越えて焼かれなかった」と考えて。(15) そこより東に、今は、多くの婆羅門たちがいる。そこは、まさしく、どちらかといえば居住に向かなかつた、まさしく、どちらかといえば水っぽかつた 8)、「皆に属する火によって、『おいしく』されていない」という (訳で)。(16) そこは、だが、今は、まさしく、どちらかといえば居住に向いている。婆羅門たちが、また、今やそれを祭式たちによって『おいしくした』のだから。それ (サダーニーラー川) は、炎暑の後半でさえ、まさしく、[ひとを] 震え上がらせる。それほど冷たい。皆に属する火によって、越えて焼かれなかったから。(17) そこで、ヴィデーガ・マータヴァは言った「私はどうしたらよいのか」と。「ここよりも東方に君の居場所がある」と (火は) 言った。その (川) は、今でも、コーサラとヴィデーハの人々 (国) の、この (今ひとの知っている) 境界線である。彼ら (この両側にいる人々) はマータヴァの子孫であるから。(18) 次にゴータマ・ラーフガナは言った「どうして、いったい、[君は] 我々に話しかけられながら、答えなかったのか」と。彼は言った「皆に属する火が私の口

の中にあつたのだ。それが私の口から漏れ落ちてはならない。それ故、君に答えなかったのだ」と。(19)「それが、だが、どうなったのだ。」「君が『液体バターを背に [滴らせる] 者よ、我々は願う』というところまでことばにした時に、するとまさに、『液体バター』[という語が]聞こえると、皆に属する火が私の口から燃え出たのだ。それを私は支えられなかったのだ。それは私の口から漏れ落ちたのだ」。(20)そこで、燃え上がらせる讃歌たちの中に液体バターの語があるのは、—これは燃え上がらせる [ことば] である。—まさしく当の者をそれによって燃え上がらせることになる。ほかならぬ雄々しい力をこれ (祭火) に置き定めることになる。…

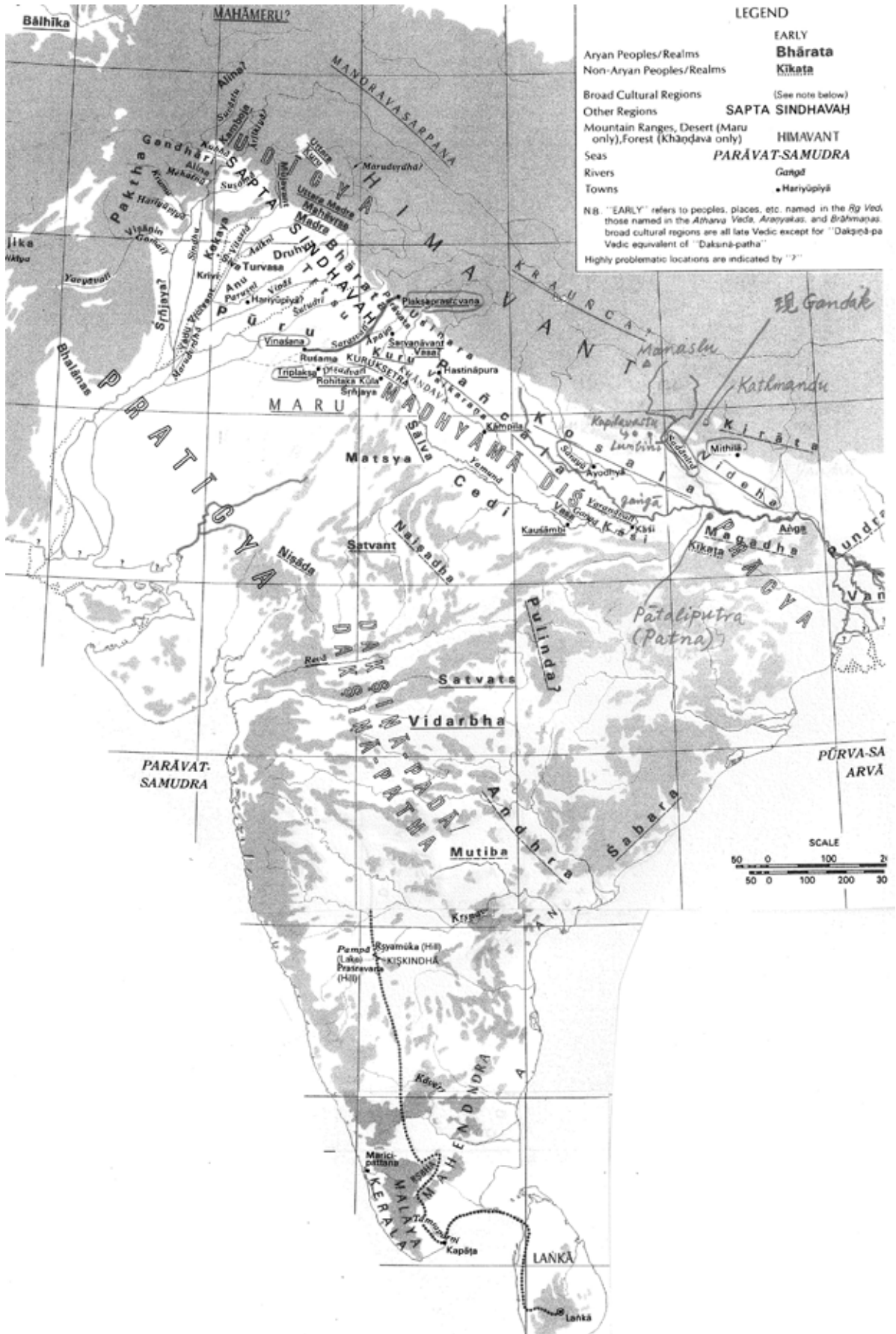
次に、本報告に必要と思われる事項を中心に注解を付す。

1.1. 祭火は献供に先立って、焚き木 (*samidh-*) を加えて燃え上がらせられるが、その時、リグヴェーダを護持するホータル祭官が脇に立ってガーヤトリー韻律 (8-8-8 音節) による簡単なアグニ (火) への讃歌を唱える。その讃歌を *Samidhenī* 「燃え立たせに関する (讃歌 *śc-*)」と呼ぶ。今扱っているシャタパタ・ブラーフマナ (以下 ŚB) では、リグヴェーダ (以下 RV) の III 27,1, VI 16,10, 11, 12, III 27,13, 14, 15, I 12,1, III 27,4, V 28,5, 6 の計 11 讃歌を予定する (KRICK Feuergründung 255f. n.633, EGGELING ŚB 訳 102f., TB III 5,1-2 参照)。

しかし、この「神話」の語り手は、ヴィデーハ国建国譚を語るべく、*ghṛtācyā* 「液体バターにまみれた [柄杓] によって」と *videgha* 「ヴィデーガよ」の語を含む、それぞれ RV V 26,3 と VIII 44,17 とを用いたものとしている。ともに同じ韻律によるアグニ讃歌である。RV においては、*videghā-* はアグニへの呼びかけで、「幅広い肉体をもった」、すなわち、燃え広がる野焼きの火を意図していると考えられる。この挿話は、これを、ミティラーに王国を建てた部族名ヴィデーハ *Videhā-* (国名にはその複数形を用いる: 「ヴィデーハの人々」。首長ジャナカは *Videha-* とよばれる) の古形として利用している。*videghā-* は、この文脈では「幅広い肉体をもった」または「泥地の広がった」意味に解することができる。

1.2. マータヴァ *Māthavā-* は「盗人 (*\*māth<sub>2</sub>-u-* または *māth<sub>2</sub>-ú-*) の息子、子孫」と解せるが、古い神話の存在を示唆する。ギリシャ神話のプロメテウスは、古インド・アーリヤ語動詞  $\sqrt{math}$ , *mathnāti*, *pra-mathnāti*, *mathāyāti* 「盗む、くすねる」に遺る印欧祖語 *\*math<sub>2</sub>* (*\*pro-math<sub>2</sub>* 「盗み去る」) からの派生語である: *Promētheús* < *\*pro-māth<sub>2</sub>éu-* (プロメテウスの語源については、NARTEN IJ 4, 1960, 135, = Kl.Schr. 25, n.40 参照)。インド、ギリシャ双方における特殊な孤立語形から、天界から火を盗んで地上にもたらずインド・ヨーロッパ祖語段階に遡る神話の存在が推定される。インドには *Mādhava-* という固有名詞も現れるが (YV マントラに春の月の名として出るのが初出、おそらく *mādhv-* 「蜜、蜜酒、甘い」からの派生語)、*dh > th* の変化は特殊な条件下でのみ見られる。GOTŌ Anusantatyai. Festschrift Narten (2000) 110 参照。プロメテウス、インドのマタリシュヴァン (*Mātariśvan*) と火を盗むモチーフについては、NARTEN 同所のほか KUIPER, AsS 25 (1971) 85 - 98 “An Indian Prometheus?” (Ancient Indian Cosmogony 1983, 216-229, GOTŌ RV I 127,7, I 141,3f. (Rig-Veda: Das heilige Wissen, Verlag der Weltreligionen, 2007) をも参照されたい。祭火の地上への将来について → 6.

口の中に火をもっていたというのも、火を盗む神話に合うモチーフである。ダーヌの息子シュシュナというアスラが口の中に *amṛta-* (不死の飲料) をもっていたという KS XXXVII 14:94,4 参照。



ヴェーダ時代のインド (Schwartzberg ed. A Historical Atlas of South Asia. The Chicago University Press, 1978 より合成)

1.3. ゴータマ *Gótama-* はここでは Vorname。ラーフーガナ *Rābhūgaṇá-* は RV に現れる *Rābhūgaṇa-* (I 78,5 *Rābhūgaṇāḥ* 「Rābhūgaṇa の子孫たち、一族: 複数形によって一族を表示」からの *Vṛddhi* 派生による氏族名。 *gaṇá-* は一群、眷属の意味であるが、それ以上は不明。I 78,1 では *Gótamāḥ* 「*Gótama-* 家の人々」とよばれているが、そこでは *Gótama-* はリシ *Rṣi* の家門名 (Gotra) である。

1.4. サラスヴァティー *Sārasvatī-*: 14 節では、ヴィデーハの部族がそこから東進したものとしている。

1.5. サダーニーラー *sadānīrā-*。今日の Gandak 川 (*Gaṇḍaka*) に比定される。ヒマラヤ山中に発するため、一年中水がある。R. SALOMON “The three cursed rivers of the east, and their significance for the historical geography of ancient India”, *The Adyar Library Bulletin* 42 (1978) 32–60 参照。一般に、ドラヴィダ起源とされる古典期の *nīra-* 「水」により、「常に水がある」と語源解釈されるが (MAYRHOFER *EWAia* II 50, SALOMON 同書 44 注 1 参照)、*nīla-* の *r* 方言形による「常に青い」と解すべきである。アクセント位置もこれを支持する: 後藤敏文『インド考古研究』26 (2005) 184f。

1.6. 「おいしく」されていない *āsvadita-* (15), 「おいしくした」のだから *āsiṣvadan* (16):  $\sqrt{svad}$  (英語 *sweet*, ギリシャ語 *hēdū-* などの語源 *\*suādū-* 「甘い」も同語根に遡る) は野焼きによって開墾することを意味する特別な動詞表現であり、ヴィデーハ族が野焼きを行いながらガンジス北岸の、比較的乾燥した地帯を選んで東へ領土を広げたことが窺われる。→ 3.1.

## 2 クスイターイーとの戦車競争

### 2.1. 『マイトラーヤニーサンヒター』II 1,11:13,1–7

ヴァーマデーヴァの 15 の [詩節 *ṛc-*] が [祭火を] 燃え上がらせるときの詩節たちとして用いられるべきであり、献供時の讃歌と献供に先立つ讃歌として [用いられるべきである]。ヴァーマデーヴァとクスイターイーとは戦車競走をしたのだ、自身を賭けて。するとクスイターイーは、ヴァーマデーヴァの戦車の手すりを (車をあてて) 壊した。彼女は、あらためて、近づき寄ってきた、「軛でも壊すことになろう、あるいは、ながえを」と [考えながら]。彼は火鉢の火に目を落とした。すると [彼は] このマントラ (祝詞) を見た (観得した)。[すると] 彼女を、焰が焼き払った。彼女は焰に焼かれながら池に入り込んだ。それがまさにクスイタの池なのだ。危害を加える諸力を彼はそのことによって打ち退けたのだ。それ故、彼 (祭主) は危害を加える諸力をこの [マントラ] によって打ち退けることになる。

### 2.2. 『カタ・サンヒター』I 5:130,2–7

ヴァーマデーヴァの 15 [詩節] からなる、危害を加える諸力を打破するこの [讃歌] が、祭火に焚き木を投ずるときの詩節たちとして用いられる。ヴァーマデーヴァとクスイターイーとは自身を賭けて戦車競走をしたのだ。クスイターイーは、追い越して先行する彼の [戦車の] 手すりを (車をあてて) 押し潰した。彼女は二度目に [車の] 向きを変えて近づいた、「ながえか、車軸でも折ることになろう」と [考えながら]。かのヴァーマデーヴァは火鉢の火を持つ



ていた。[彼は] その火に目を落とした。彼は「おまえは [おまえの] 最前面を幅広い（左右に展開した）突撃のようにせよ」[で始まる] この讃歌を見た（観得した）。（すると）彼女に、火は追いかかって、焼き尽くした。彼女は焼かれながらクスイダの池に潜り込んだ。この讃歌が伴唱されるのは危害を加える諸力を害する（滅ぼす）ためにである。

2.3. 毀損力排除（羅利退散）の目的で行われる特別な新月祭の「祭火を燃え立たせる讃歌」に、ヴァーマデーヴァ作の RV IV 4 が用いられる理由を語る物語。ヴァーマデーヴァは RV 第 4 巻の作者と伝えられる詩人（または、家系の祖）で、祭官詩人家系を示唆する「好ましい神々をもった」が原義。

2.4. 一見、魔女や魔法を焼き払うという観念 (cf. FRAZER Golden Bough §63-3, 永橋卓介訳、岩波文庫版第五巻 16ff.) が想起されるが、この話はむしろ、部族の火を中心に移動するアーリヤ部族の領土拡張に重点がある。

2.5. 戦車競走の最中に何故「火鉢に入れた火」をもっていたのか：

ウカー (*ukhā-*) は英語 *oven*、ドイツ語 *Ofen* などに連なる語彙である。焼成煉瓦を 5 層に積み上げて火壇を作る大規模祭式アグニチャヤナでは、祭主が紐のついたウカーに火を入れ、首に懸けるなどして一年間護持する。曾ての移動生活における部族の火（あるいは家長の火）を象徴するものと解釈できる。部族の火（または大家長の火）は移動時にウカーに容れて運ばれたことが推測できる。また、王族や有力祭官が移動に戦車を用いることはブラーフマナに散見する。

MS I 8,9:129,10 以下とその平行箇所にも語られるアグニホートラの失敗帳消し儀礼は、移動中のそのような火に起こる不都合を意図していると考えられる（野焼きの火に関するとも考えられるが、*apa-kṣā* を AMANO Diss. のように 'sich verbreiten' 「道から外れて広がる」とするのは無理で、「焼け落ちる」と考えるべきであろう、ĀpŚrSū IX 1,17-22 と CALAND の注を見よ。

2.6. 部族間の争い決着の方法：罵り合い、謎かけ（ことばによる決闘）、賭け事 (*akṣā-*)、戦車競走、そして、武力

武力によって最終的に衝突に至る前に、代表者による複数の決闘が行われていたようである。また、明らかに力の違う部族間が競合する場合にも、「手締め」の儀礼が用いられたであろう。罵り合いについては、それを専門にする職名から出た名が遺っている：インドの有力部族名 *Kūru-*、アケメネス朝の王名 *Kuru-* (キュロス *Kyros*) である：「(相手を) 罵倒する者」。謎かけ問答（ことばによる決闘）は *brahmōdya-* 「ブラフマンについての議論」という形で祭式文献に引き継がれている。祭官選び、学者間の決闘、村落の攻防などのシーンにも現れる。賭け事 (*akṣā-*) は 5 の倍数からなるヴィビータカ（後にヴィビータカ）という木（セイタカミロバラ）の実（アクシャ「目」とよばれる）を場に蒔き、これを掴むことを中心とする。一番強い目が 4 で割り切れるクリタ（「できた」）、次がトレーター（「三つ組」）、次いでドウヴァーパラ（「二余り」）、最悪がカリ（「？」）である。マハーバーラタの国盗りの賭博もこれによる。戦車競走はリグヴェーダの表現や比喻に頻出する。競技の実際は未だに不明であるが、広くユーラシアに見られ、共通要素も多いようである。クスイターイー（クスイダーイー）の行為は戦車による決闘のテク

ニックであったと思われる。

2.7. このマントラを「見た」：リグヴェーダをはじめ、ヴェーダではマントラ（祭式に用いられることば、祝詞、「真言」）を作る行為は常に「見る」と表現される。その能力を持つ者が *kāvi*-「見者」、*ṛṣi*-「荒ぶれる者」、*vīp*-, *vīpra*-「(靈感に) うち震える者」である。ヴェーダ文献がシュルティ *śrūti*- とよばれるのは学習によるからであり（「聞き学ぶこと」）、「天啓聖典」という紹介は誤解を生む。

2.8. *Kusitāyī* (MS) ~ *Kusidāyī* (KS) は非アーリヤ語である。アーリヤ系の語であれば、u の後で *s* は *ṣ* に変化する（インドイラン共通段階で、スラヴ語派の一部、バルト語派の大部分を巻き込んだ *ruki* の法則）。女性の首長または祭官は、インドには知られていない。ウパニシャッドの論争にはガールギー *Gārgī-Vācaknavī*- が登場し、ヤージュニャヴァルキヤに論争を挑むが (BĀU III)、このウパニシャッドの基となった ŚB X には現れず、祭官としての背景も窺われない。何らかの事情が背景にあるとしても、文学的脚色と判断される。

アヴェスタには、「ハオマの分与を食しながら座る、種間なく叫んでいる、ならず者女」が「祭官とハオマを欺いているつもりで自ら欺かれて滅び行く者」とされ、彼女は祭官の息子、良い息子を持つ者とならないと述べられる (Y 10,15, 後藤敏文『印度學佛教學研究』54-1, 2005, 321 n.8, *Indogermanica*, Fs. Klingenschmitt, 2005, 197f.)。BMAC, 楼蘭、「古ヨーロッパ」に広がっていた女系が指導力を持ち得た社会がインドの地にもあったものと考えられる。神格化された社会制度の神々の母である アディティ (*Āditi*-「無拘束」) とアヴェスタのアナーヒター (*Anāhitā*-「結びつけられていない女」) の背後にも、それぞれの言語に借用翻訳された非インド・イラン系の女神の存在が窺われる (GOTŌ “*Vasiṣṭha und Varuṇa*”, *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik*, 2000, 160f., さらに、これに基づく OETTINGER MSS 61, 2001, 163-167, KELLENS *Orientalia Suecana* 51-52, 2002-2003, 317-326)。リグヴェーダ X 95 に歌われるウルヴァシーの語源は「雌羊」と考えられ (KLINGENSCHMITT bei GOTŌ “*Purūravas und Urvaśī*” aus dem *Vādhūla-Anvākhyāna*”, *Anusantatyai*, Fs. Narten 102, n.85), 羊→羊毛→織物→女性、女性社会という連鎖を想起させる (→6.)。BMAC の女神や羊の墓はこれら一連の複合体との関連で興味を引く。後のマハーバーラタに知られる「サーヴィトリ物語」には、彼女の両親の社会が母系的であることを窺わせる要素が散見する。

インド・ヨーロッパ語族は西方でも (ギムブタスのいう「古ヨーロッパ」)、東方でも (BMAC, 場合によっては楼蘭も)、母権的ないし、少なくとも女性が大きな役割を担っていた「文明」の中を突き進み、その男権的原理によって競争に勝ち抜き、支配権を拡げていったといえる。「文明と野蛮」という定規で見ると、*ārya*-「アーリヤの人々に該当する」(もともとは、おそらく「部族の成員の慣習に従う」) の *dhárma*- とはこの意味での父権的「文明」を言う語ではなかろうか。背景に母系文化との衝突があるかもしれない。プルーラヴァスが鴨となって地上に戻っているウルヴァシーを止めようとして呼びかける *gbore* (RV X 95,1) 「むごい女よ」は、場合によっては、この意味で「野生の女よ」(THIEME) とも考えられる。→3.3.

2.9. 「クスイタ/クスイダの池」は当時知られていた地名を用いて、この物語の正しさを、従って、用いられる讃歌の効力を「論証」するために引かれている。この地名が先にあり、「クスイタ/クスイダの女」が作られたとも、同地の部族をこの名で呼び、その女性形を用いたものと

も考えられる。よく知られていない地名を引くときには、インド・ヨーロッパ語族に共通する「地名の挿入節」が用いられる。ここにそれが用いられていないことは、この名が、少なくともマイトラヤニー派、カタ派の人々に自明であったことを証左する。

### 3 野焼き、藪焼き、開墾、cultivation

3.1. 動詞 *svad* 「おいしくなる」が野焼きによって開墾された土地に育つ「食すことのできる」植物を謂う例 (→ 1.6.) : GOTō, Die I. Präsesnsklasse im Vedischen, 341, n. 839 に動詞語形の現れる箇所が列挙されている。さらに、MS I 8,4:120,17–20, MS II 1,2:2,17–19 – KS X 3:127,1–3 – TS II 2,6,1–12, KS VI 5:53,14–16 – KpS IV 4。→ 3.3.

3.2. *navadāvā-* 「新しく焼いた土地」は「新開地」の意味で用いられる、cf. *nāvavāsana-* 「新しい入植地」。*lóka-* 「世界」は語根 *roc/ruc* 「光を放つ」の *l* 語形による。もともと、ドイツ語で「光」とともに、林間の火をかけて焼き払った土地を意味する ‘das Licht’ であった可能性は高い (下に見るように、草原も焼いてから用いたらしいので、必ずしも森林に住んでいたと考える必要はない)。印欧祖語 *\*reydʰ-* 「開墾する」は新アヴェスタ語、ドイツ語 (地名にも多い) に残る。

ブラーフマナ (YV 散文、ブラーフマナ文献) 以降の文献証拠 :

斧で木を切り倒す (冬前) → 火をかける (春の寒い時期、MS I 8,2:117,10–12, KS VI 2:51,6–8, KpS IV 1, VādhŚrSū IV 1,1, X 1) → 鋤 (*lāngala-*) で掘り起こす (または、掘り混ぜる) → 鋤 (*matyā-*) を用いて平らに砕き均す。

藪を焼く : PB XVII 7,2, MBhār XII 83,47f.; 5 火 2 道説中の野焼き (Junko SAKAMOTO-GOTō, Fs. Narten, 2000, 248, 27. DOT, 2001, 160f.)。

古インドアーリヤ語では *dav/du* が用いられる (HOFFMANN Aufs. 168–171 の扱う箇所は多くこのような野焼きの火であり、山火事の野火ではない)。RV のアグニ讃歌も予想以上に多く野焼きの火を歌う : GOTō RV ドイツ語訳 (WITZEL, GOTō–DŌYAMA–JAŽIĆ Rig-Veda. Das heilige Wissen, Verlag der Weltreligionen, 2007) Glossar, p.826 を見よ。

藪焼きの行事 : エーカーシュタカーの日 (新年直前の 8 の日、23 夜?) に火をつけたパンケーキを藪に投げ込んで豊作を占う : TS III 3,8,4–5, VII 3,8,4, VaitSū XXXI 4 (*sattra* の *dikṣā*); ĀśvGrhSū II 4,9, ŚānGrhSū III 14,5, GobhGrhSū IV 1,21 etc. (祖霊祭)。

3.3. 野生動植物への忌避。 *āraṇya-* 「原野、森林 (原意はよその土地) に属する」 (*āraṇa-* 「よその」 :: *nitya-* 「うちの」) の対立項はインド・ヨーロッパ祖語に遡る概念、語彙である) , *krūrā-* 「生の、生臭い、血なまぐさい」に対し、馬、牛、ヤギ、羊 ; 大麦 (RV より後には米が加わる) は人間の集団 (*grāma-*, 後には「村落、集落」) に属する。一 鳩麦 (ジュズダマ) は去った居住地に属するとされる (要検討)。胡麻は祖霊祭に用いられ、通常の祭式には用いられない。祭式に用いられるのは、人が cultivate するミルクと大麦の製品が中心である。野生動物、蜜、胡麻などは通常の献供の対象とはならない。「酸乳 (*dādhi-*) は村落に属する、蜜は原野に属する」 TS V 4,5,2。「神々は生のもの、調理されていないもの (火の通っていないもの) は食さない」 (br. 以降散見)。例えば、ヤヴァーグー (ある種の穀物食) は *krūrā-* (生、多くは流血の傷などのに

謂われる) とされる。「文明と野蛮」→ 2.8。

### 3.4. 水による更新 (→ 洪水神話) と火による更新

## 4 植民活動

東へ : KS XXVI 2:123,17; BaudhŚrSū XVIII 45 (プルーラヴァスとウルヴァシー) : 東へ移動した Āyu (「活発な」) の子孫は Kuru, Pañcāla, Kāśī, Videha; 西へ移動した Amāvasu (「家に留まった」、従って実際には移動しなかった) の子孫は Gāndhāri, Pārsu, Arāṭṭa。Pārsu- は一度に 20 の子を生んだ マヌの娘の名 *pārsu-* (普通名詞としては一本の「あばら骨」) RV X 86,23、ペルシャ族の名 *Pārsa-* (<\**pārcua-*、古インドアーリヤ語 *pārsvá-*)「脇腹から生まれたもの」(RV IV 18,2 参照)を想起させる。

南へ : MS IV 7,9:104,14f.

北へ : JB III 146 (「息子を」)。

長男を : TS II 5,2,7。

100 人の男児から年長の 50 人を : シュナハシェーパの物語 (AB VII ~ ŚānŚrSū)。

4.1. 遠征 : TBI 8,4,1 (夏季の略奪行); 3 群に別れて : RV X 75,1 (7 部隊毎 3 群), JB III 120 (順次 3 群で)。「7 つの秋の防御柵 (*pūr-*)」 RV I 174,2。

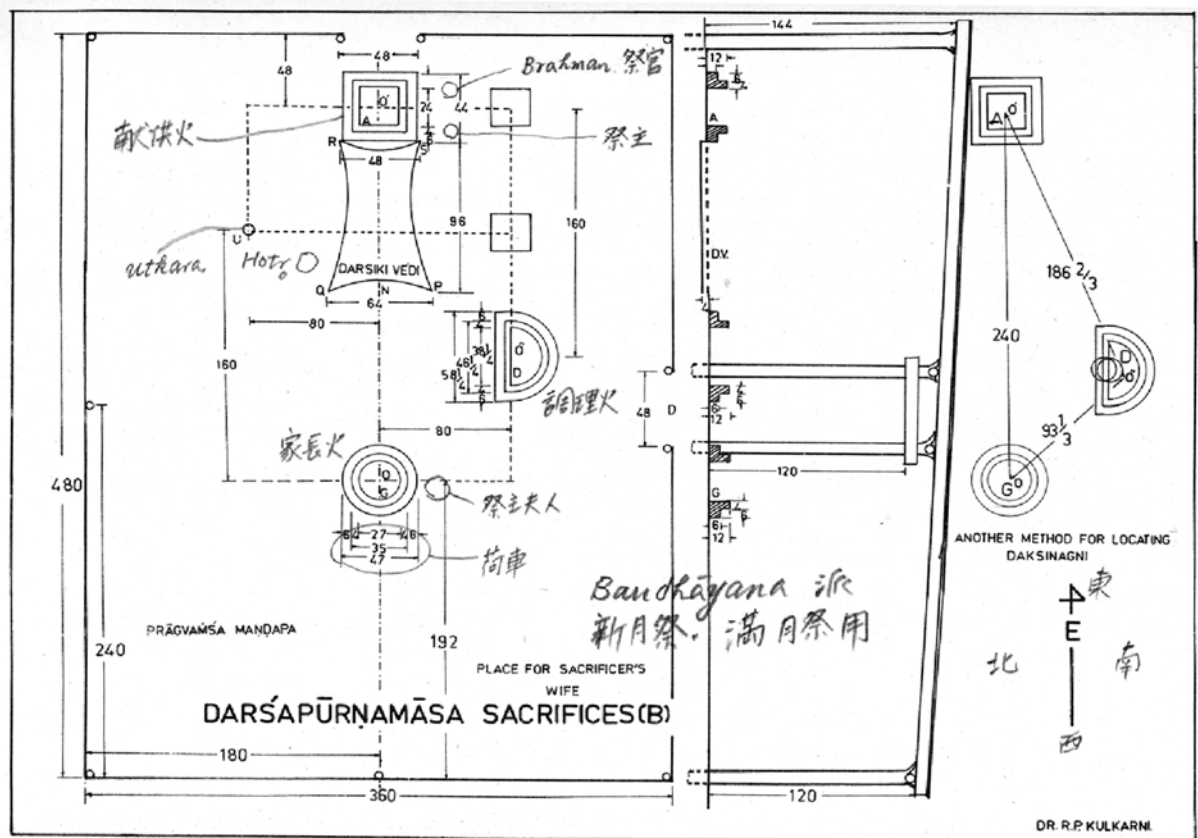
## 5 祭式における移動生活、植民活動の模倣

シュラウタ祭火設置祭 (Agniyādheya) における祭火の行進 (Agnipraṇayana) : アシュヴァッタの木から作った焚き木に燃やしつけ、西の「家長に属する」祭火から、東の「注ぎ入れられるべき」献供用祭火まで、馬を先頭にたてて運ぶ。途中、焚き木を掲げるなど諸儀礼がある。アドヴァリユ祭官は焚き木を、行程の 1/3 を膝の高さ、1/3 を臍の高さ、1/3 を口の高さに、太陽と祭火との間に (自分または障碍が) 入らぬよう右側に両手で掲げ、運ぶ。その北側を祭主が進む。ブラフマン祭官が南側の祭場で (派によっては両祭火間を) 戦車またはその車輪を回転させる。居住地の跡と同置される馬の足跡を避けて進む。

この行程に用いられる用語は、遊牧生活の移動に用いられる用語である : 「宿営する、入植する (移動の荷を解く)」、「移動入植する」、「宿営地を立つ」など。坂本 (天野) 恭子、印度学仏教学研究 45 (1996) 492f., 山田智輝、論集 32 (2005) 53-71, KRICK Feuergründung (1982) 377ff. 他参照。RAU Staat und Gesellschaft (1957) 51ff. が移動集団 (*grāma-*) の移動中の宿営について確認する内容は、車陣をはじめ、山崎元一『古代インド社会の研究』(1987) 191 が挙げる隊商の宿営に類似する。雨季の長期滞在についても比べられるべき点がある。

### 5.1. 移動遊牧生活と定住生活

「祭火を保持しながら、[荷車に] 運ばせて往復すべきである」と [人々は] 言っている。ともにプラジャーパティの子孫である神々とアスラたちとは競い合っていた。その際神々は車を移



Prācīnavamśa 「東向きに梁をもった」小屋（ヨーロッパの教会も東を向く）

動していた、アスラたちは小屋住まいをしていた。彼ら神々は車によって移動している時に、この行作を観得した。車によって神々が移動している時に、この行作を観得したのだから、それ故、供物用パンケーキ（プロードーシャ）に関わる〔諸祭式〕の場合には、ヤジュス（アドヴァリユ祭官の唱える祭詞）たちは荷車に属する、アグニ〔チャヤナ〕の場合には荷車に属する」（ŚB I 1,2,5）

「その際、他ならぬ荷車から〔材料の穀物を〕取るべきなのだ。荷車が、つまり、初めに〔あった〕のだ。この小屋の中にいること（小屋住まい）、それはまさしく後から〔ある〕のだ。そこで、初めに〔あった〕こと、それを私は為そうと〔考えてのことである〕。それ故、他ならぬ荷車から取るべきである」（ŚB VI 8,1,1）。

→7.2.

## 6 （祭）火の地上への将来

マータリシュヴァン、ブリグたち、そして、マータヴァ → 1.2.

プルーラヴァスとウルヴァシー：水の精（天女）が地上の王と4年間暮らし、息子ができたが王のもとから去る。王は鴨の姿で地上に帰ってきている水の精を探し出し、天で生まれた子（実家でお産をした）を返してもらう。死後、かつての妻と一緒にありたいと願う王に、神々は子とともに祭火を渡し、祭式を行って死後天界に来るよう「契約」。原野に置き忘れた祭火から生じたアシュヴァッタ（インドボダイジュ）を用いて火を鑽り出し、羊毛に燃やし

つけて使う。RV に既に全てのモチーフが揃う。その具体的内容が物語として伝えられているが、ŚB 版は RV とよく合う。BaudhŚrSū、VādhAnvākh 版もそれぞれ異なり、重要な要素を伝える。GOTŌ “Purūravas und Urvaśī aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākyāna (Ed. Ikari)” Anusantatyai. Fs.Narten (2000) 79–110、後藤敏文「新資料 Vādhūla-Anvākyāna の伝える『Purūravas と Uruvaśī』物語」『インド哲学佛教思想論集：神子上恵生教授頌寿記念論集』2004, 845–868 参照。

「火」と「太陽」、火を用いる祭式と、それによって昔の神々が帰って行った天界に死後行く、つまり、戻る。

→2.8.、→7.3.

## 7 原初への帰還と永遠の循環

7.1. 領域拡大が生命線であった。RV に残る遺産を再点検する必要。略奪、遠征は比較的良く翻訳に反映されていると思われるが、アグニ讃歌にもより注意が向けられるべきである。かなりの数に上るガーヤत्री韻律による単純なアグニ讃歌の背景にも、部族の火、野焼きの火を歌うものが多くあることに注意がいる。それらが、後の祭式の構成の中で、焚き木を燃え上がらせるための讃歌に組み込まれている。

7.2. 原初の姿、理念、帰還すべき理想状態。「アディティの、からだから生まれた息子たちは 8 人 [であった]。彼女は、7 人とともに、神々のもとへと去った。[彼女は] マールターンダを捨てた。7 人の息子たちとともに、アディティは原初の代 (世) のもとへ去った。子孫の為に (子孫をもたらしべく)、他方また、死の為に (死をもたらしべく)、彼女は マールターンダを連れ戻した (RV X 72: 後藤敏文「人類と死の起源 - リグヴェーダ創造讃歌 X 72-」 佛教文化学会十周年、北條賢三博士古稀記念論文集『インド学諸思想とその周延』2004, (415)-(432) 参照)。

7.3. 永遠に巡る循環: アディティ→ダクシャ→アディティ、プルシャ→ヴィラージ→プルシャ。「一年間 (牛の年子が生まれてから次の年子が生まれるまでの完全期間)」ŚB XI 1,2,12 (ダークシャヤナ「Dakṣa の行程」) XII 1,2,3, XII 1,3,22 (後藤敏文 同論文参照)。

## 8 まとめ

女性原理との融和を図り、その中の要素を取り込みながら理論化してゆく。領土拡大と彼らの理念 (戦略)。ヴェーダ文献 (前 1200 年頃 - 前 500 年頃) には前 4500 年から前 500 年に亘る印欧語族の領土拡大、理念貫徹 (父権制による攻撃的政治経済) の歴史の記憶を留める。

### 【註】

1) インドの基本祭式 (新月祭、満月祭) における敷草刈りについては、西村直子『放牧と敷草刈り - Yajurveda-Samhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究 -』東北大学出版会 2006 参照。

- 2) 厳密には VII 95 と 96 は、Sarasvatī と Sarasvant の二者に対して捧げられている。Sarasvatī の男性形の対応神格 Sarasvant は、I 164,52、VII 95,3 (*sárasvant-* の名は直接言及はされない)、VII 96,4-6、X 66,5 に登場する。HILLEBRANDT は「鷲 (*suparná-*)」という語で形容されている点や、(雨) 水を運ぶ者として描かれる点に、Apām Napāt や Soma との共通点を見出している。Cf. *Vedische Mythologie I* (1927<sup>2</sup>) 357ff. I 164,52 *divyám suparnám vāyasám brhántam | apām gárbbam darśatám śśadbhinām | abhīpató vr̥stībhis tarpāyantam | sárasvantam ávase jomavimi ||* 「天に属する良い翼をした、高い〔所を飛ぶ〕鳥に属するものを、水たちの、植物たちの、見かけの良い胎児を、水（の流れ）に沿って、降雨たちによって満足させている Sarasvant を、助けのために私は何度も呼ぶ」。
- 3) Sārasvatasattra. Sarasvatī 川は天界へと続く聖なる河川とされ、その河岸部を遡上する形でこの儀礼は執り行われる。成果としての牛の数が一定数増大した時点で終了となる。Sarasvatī 川付近に住む他部族の牛を狙った、往時の略奪行の存在が背後にあることが指摘されている。Cf. KRICK *Ritual der Feuergründung*, (1982) 496ff. EINOO はこの Sattra を河岸部における牛の飼育の祭式化と位置付ける (cf. 「Is the Sārasvatasattra the Vedic Pilgrimage?」『空と実在：江島恵教博士追悼論集』, 2001, 607-622)。
- 4) Cf. GOTŌ „Die I. Präsensklasse“ im Vedischen (1987) (以下 GOTŌ 1987) 133 n.166。
- 5) 「天の奴隷／使用人」の意。Cf. MAYRHOFER *Die Personennamen in der R̥gveda-Saṁhitā* (2003) (以下 MAYRHOFER *Personennamen*) 44。
- 6) 「去勢された馬を持つ」の意。Cf. MAYRHOFER *Personennamen* 78。
- 7) 文字通り訳すと「引き続き起こる Paṇi を」。詳細は解説を参照。さらに cf. KÜMMEL *Das Perfekt im Indoarischen*, (2000) 153 “die von einem Paṇi nach dem andern die Wegzehrung an sich gerissen hat”。
- 8) アーリヤに属さない裕福な一部族の名。Vala と呼ばれる岩でできた常設防御施設（洞窟？）の中に牝牛たちを隠していたとされる。雌犬 Saramā が Rasā 川を渡ってその牝牛たちを見つけ出し、Brhaspati に導かれた Aṅgiras 達が彼らの発語する詩の熱力によって洞窟の壁を破壊し、Indra が中に匿われていた牝牛たちを解放するという一連の神話 (Vala-Mythos) により広く知られる。この神話では牝牛たちが更に太陽光になぞらえられており、Indra による太陽光の解放の神話が重ねられていると考えられている。Cf. GOTŌ *Rig-Veda: Das heilige Wissen*, Verlag der Weltreligionen (2007) (以下 RV-VDWR), 840。
- 9) MSS 33 (1975) 67-78 = *Austätze zur Indogermanistik* 150-157。
- 10) Cf. MACDONELL/KEITH *Vedic Index of Names and Subjects* (1912) (以下 *Vedic Index*) 363f. 後の Brāhmaṇa の中には、十王戦争で Indra の庇護を受ける人物として、Sudās ではなくこの Divodāsa の名を伝えているものもある (cf. 辻直四郎 *古代インドの説話*, 1978, 111)。KS VII 1,8 には Divodāsa Bhaimaseni という名の人物も登場する。
- 11) Cf. *Der Rig-Veda III* 245
- 12) Cf. GRASSMANN *Wörterbuch zum Rig-Veda* 587 “4) eine Person [A.] einer andern [D.] als Sohn, Beschützer, Gatten oder Gattin geben.”
- 13) Cf. HOFFMANN *Aufsätze zur Indoiranistik* 387。
- 14) *parāvāt-* は「天界ではない死者が行き着く場所、人間の世界とは別の異界」を特に意味することが BODEWITZ によって指摘されている (cf. “Distance and Death in the Veda” *Asiatische Studien* 54-1, 2000, 103-117)。AV X 10,3 では、天地の間の水の循環に関する議論の中で、上下する水流の道筋を表す語としてこの語が *pravāt-* と対で用いられている (*vedābām saptā pravātah | saptā veda parāvātah* ‘Ich kenne sieben herwärtsfließende [Wasser, oder Ströme]. Ich kenne sieben hinwärtsfließende.’ Cf. SAKAMOTO-GOTŌ “Das Jenseits und iṣṭā-pūrtā-” *Indoarisch, Iranisch, und die Indogermanistik*, 2000, 480)。また *pārāvata-* は「m. コキジバト (Turteltaube)」も意味する。
- 15) *van* desid. opt. 1 pl. act.
- 16) Cf. MAYRHOFER *EWAia II* 122f.、*Personennamen* 55 及び *Vedic Index* 518。

- 17) 文字通りには「計算力を持つ者達」という意味。
- 18) 直訳すると「毒を流れた」。「毒を」は Inhaltsakkusativ。即ち Sarasvatī の流れそのものが、毒として敵対者達に働いたという意味。
- 19) RV I 93,4 *ágnīsomā cēti tād vīryam vām<sup>1</sup> yád amuṣṇitam avasām pañim gāb<sup>1</sup> | ávātīratam br̥sayaśya śésó<sup>1</sup> vīndatam jyótir ekam bahúbyaḥ* || 「Agni と Soma よ、その君達二人の英雄的行為は知られている、君達二人が Pañi から旅路の糧を、牛たちを奪い取ったという（その英雄的行為は）。君達二人は Br̥saya の子孫を押しえつけた。君達二人は一つの光を多くの者達のために見つけ出した」。
- 20) Cf. GOTŌ RV-VDWR, 838.
- 21) または「戦車競争たちによって」。
- 22) この詩節は TSI 8,22,1 (Rājasūya の末尾) に引用されている。
- 23) つまり「懸賞がかけられた時に」。
- 24) 文字通りには「開削せよ」の意。
- 25) Cf. OLDENBERG Die Religion des Veda (1917<sup>2</sup>) 73, HILLEBRANDT Vedische Mythologie II, (1929<sup>2</sup>) 326ff, MACDONELL Vedic Mythology (1898) 35ff, GOTŌ RV-VDWR 841.
- 26) 二本の角を頭に生やし山羊の足を持つ、家畜の繁殖を司る神。生まれた時から長い鬚を蓄えていたとされる。時折羊や山羊に、さらには人間の群衆にまでも集団心理的恐怖に起因する混乱・恐慌 (panic) をもたらすとされる (cf. 呉茂一ギリシア神話新潮社, 1969, 183f)。
- 27) Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik (2000) 393-400. さらに cf. “Semantisches zu Pan, Pūṣan und Hermes” Mír curad : studies in honor of Calvert Watkins (1998) 539-548.
- 28) GONDA は Pūṣan and Sarasvatī (1985) でこの問題について概観している。
- 29) 流れたあとに黄金が残るという意味。
- 30) *āti-tan* aor. 3<sup>rd</sup> sg. act. 機能は「確認」。
- 31) *prá-pra dās<sup>1</sup> vān pastyābbir asthitā<sup>1</sup> ntarvāvat kṣāyam dadbe* || 「[神々に] 捧げる者 (祭主) は、河川 (居住地?) たちとともに、前 (東) へ前 (東) へと進んだのだ。内側に向かって、自らの居住地を彼は定めた」。
- 32) Cf. Der Rig-Veda II 163.
- 33) OLDENBERG は *saptásuasā* もしくは *saptásvasaa* と読む可能性を示唆している (cf. Textkritische und exegetische Noten, 1909, 406, 及び Metrische und textgeschichtliche Prolegomena, 1888, 37f) が、一音節不足した詩節と解釈しておく。
- 34) ただし「～となる」とも解釈できる。Cf. HOFFMANN Injunktiv im Veda (1967) 135 及び 140. さらに 214 「結果の確認」も参照。
- 35) Cf. GOTŌ “Purūravas und Urvaśī’ aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākyāna (Ed. IKARI)” Anusantatyai. Fs.Narten (2000) 88 n.32 及び後藤敏文「新資料 Vādhūla-Anvākyāna の伝える『Purūravas と Uruvaśī』物語」『インド哲学佛教思想論集：神子上恵生教授頌寿記念論集』、2004、860f. さらに cf. SCHELLER Vedisch priyá- und die Wortsippe frei, freien, Freund (1959).
- 36) MIYAKAWA は 7 という基数は流動的性格を有するものに対して用いられる傾向にあると指摘している。Cf. Die altindischen Grundzahlwörter im Rigveda (2004) 90f.
- 37) *Gaṅgā* (Ganges), *Yamunā* (Yamuna), *Sarasvatī* (Ghaggar-Hakra), *Śutudrī* (Satre), *Asiknī* (Ravi), *Marudvrdhā*, *Vitastā* (Jhelum), *Ārjūkiyā*, *Suṣomā* (Soan), *Tr̥ṣtamā*, *Susartu*, *Rasā*, *Śvetī*, *Sindhu* (Indus), *Kubbā* (Kabul-Fluß), *Gomatī* (Gomal), *Krumu* (Kurram), *Mebatnu*. 登場順。括弧内の現在の名は WITZEL RV-VDWR 432 に依った。
- 38) perf. part. は定動詞の代わりに用いられるとも、「～を満たし (終えた) 彼女は」とも解釈できる。



- 39) *bhūt* (*bhū* aor.inj.) については本文の解説 10 とその注を参照。
- 40) Cf. Das Königtum im Rig- und Atharvaveda (1960) 28-33.
- 41) HILLEBRANDT は RV の「五部族」を「ある特定の、もはや定義できない先史的アーリヤ系の集団に対する呼称」と解釈している (cf. “*pāñca jānāḥ*” ZII 6, 1928, 175ff = Kleine Schriften 334ff)。
- 42) 代表的なものとしては ZIMMER *Altindisches Leben* (1879) 119ff が挙げられる。
- 43) Cf. “R̥gvedic History: Poets, Chieftains and Politics” *The Indo-Aryans of Ancient South Asia* (1995) 313, “The Vedic Canon and its Political Milieu” *Inside the Texts Beyond the Texts* (1999) 262-264, RV-VDWR 434-436 等。
- 44) 残り二つの Sarasvatī 讃歌 VII 95 及び 96 では、それぞれ Nahuṣ 族と Pūru 族の名が言及される。
- 45) つまり「目立つ」という意味。Cf. GOTŌ 1987, 138 n.182。
- 46) あるいは「卓越へと」。高い技術力を持つ者達として描かれる R̥bhū 三神の第二神 Vībhvan と解されることもある (cf. GRASSMANN 1288, WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-2 176, SCARLATA *Wurzelkomposita im R̥g-Veda*, 1999, 365-367)。
- 47) Cf. GOTŌ RV-VDWR 849 (Glossar の *Tvaṣṭar* の項目)。
- 48) 例えば *rathakānā-* と呼ばれる戦車職人は、階級としては *sūdra* であるにもかかわらず、王室にさえも影響力を持つ者 (*ratnīn-*) としてしばしば描かれる。さらには他の *sūdra* が祭式構造の枠外におかれていたのに対し、彼らだけは自身の祭火を敷設する権利を与えられており、最下層カーストに属する者としては格別の社会的地位を約束されていた。Cf. MYLIUS “Sanskritischer Index der jungvedischen Namen und Sachen” *Ethnographisch-Archäologische Zeitschrift* 18 (1977) 491 及び *Das altindische Opfer* (2000) 148。
- 49) *āraṇa-* 「よその、よそ者」は印欧祖語の段階から *nitya-* 「うちに (中に、下に、自分のもとに) 存する、内の」の対概念として用いられる (cf. 後藤敏文「サッティヤ *satyá-* (古インドアーリヤ語『実在』) とウースィア *ούσια* (古ギリシャ語『実体』) - インドの辿った道と辿らなかった道と -」『古典学の再構築』ニューズレター 第 9 号、2001, 11)。また、*arī-* 「(敵対する・緊張関係にある *ārya-* の一) 部族の成員」と並んで *priyá-* 「味方、一員」の対義語としても用いられる (cf. 後藤敏文「新資料 *Vādhūla-Anvākhyāna* の伝える『*Purūravas* と *Uruvaśī*』物語」、神子上恵生教授頌寿記念論集『インド哲学佛教思想論集』, 2004, 860f 及び 868)。
- 50) Cf. HOFFMANN *Injunktiv im Veda* (1967) 48.
- 51) *ksétra-* が複数形で用いられている用例は、RV ではこのみである。
- 52) 第 51 回インド学宗教学会 (宮城学院女子大学 2008 年 6 月 7 日) における講演で、同じ題材を別の角度 (神話 - 儀礼 - 実生活) から扱った。

## 【付録：原典】

### 1. Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina) I 4, 1

1. *him̐kṛtyānvāha*. | *nāsām* << *ā yajñō 'stīti vā āhur. nā vā āhim̐kṛtya sāmā gīyate. sá yád dhim̐karóti tád dhim̐kārāsya rūpām̐ kriyate. pran̐avénaivá sāmno rūpām̐ úpagachaty. ó3m ó3m ity eténo hāsyaisá sárva evá sāsāmā yajñō bhavati.*  
 || 2. *yád v evá him̐karóti* | *prāṇó vái him̐kārāḥ. prāṇó hí vái him̐kārás. tásmād apigṛ̥ḥya nāsike ná him̐kartum śaknoti. vácá vārcam̐ ánvāha. vāk ca vái pran̐ás ca mithunām̐. tád etát purástān mithunām̐ prajānanam̐ kriyate sām̐idhenīnām̐. tásmād vái him̐kṛtyānvāha.* || 3. *sá vā upāmsú him̐karoti.* | *átha yád uccáir him̐kuryád anyatarád evá kuryád vácam̐ evá. tásmād upāmsú him̐karoti.* || 4. *sá vā éti ca préti cānvāha.* | *gāyatrīm̐ evaitád arvácīm̐ ca párācīm̐ ca yunakti. párācy áha devébhyo yajñám̐ vāhaty arvácī manusyān̐ avati. tásmād vā éti ca préti cānvāha.*  
 || 5. *yád v evéti ca préti cānvāha* | -- *préti vái pran̐ā. éty udánāḥ* (Ed. Weber <sup>x</sup> *udánāḥ*) -- *prāṇodānāv evaitád*

*dadhāti. tasmād vā eti ca prēti cānvāha. || 6. yād v evēti ca prēti cānvāha | --prēti vai rétaḥ sicyāta. eti prājāyate. prēti paśavo vitīṣṭhanta. eti samāvartante-- sārvaṃ vā idām eti ca prēti ca. tasmād vā eti ca prēti cānvāha. || 7. sō 'nvāha / prá vo vājā abhidyava iti. tán nú prēti bhavaty. ágna áyāhi vītāya iti. tād v eti bhavati || 8. tād u háika ābuh | ubhāyaṃ vā etāt prēti sámpadyata iti. tād u tadátivijñānyam iva. prá vo vājā abhidyava iti tán nú prēty. ágna áyāhi vītāya iti tād v eti || 9. sō 'nvāha | prá vo vājā abhidyava iti. tán nú prēti bhavati. vājā ity. ánnam vai vājā. ánnam evaitād abhyánuktam. abhidyava ity. ardhamāsā vā abhidyavo. 'rdhamāsán evaitād abhyánuktam. havīṣmanta iti. paśavo vai havīṣmantah. paśún evaitād abhyánuktam || 10. ghṛtácýeti | videghó ha māthavò 'gnīm vaiśvānarām múkhe babhāra. tāsya gótamo rāhūganā Öṛṣiḥ puróhita āsa. tasmai ha samāmantryāmāno ná prātīśṛnoti. nēn me 'gnīr vaiśvānaró múkhan nispádyātā iti. || 11. tám rgbhír hváyitum dadbre. | vitīhotram tvā kave dyumántam sámidhīmahi | ágne brhántam adhvare videghéti. || 12. sá ná prātīśusrāva. | úd agne súcayas táva súkrá bhrājanta irate | táva jyótimsy arcáyo videghá3 iti. || 13. sá ha nāivá prātīśusrāva. | tám tvā ghṛtasnav imaha ity evābhivyāharad. áthāsya ghṛtakirtá evāgnīr vaiśvānaró múkhad újjavāla. tám ná śasāka dhārayitum. sō 'sya múkhan nispede. sá imám prthivīm prápādāh. || 14. tárhi videghó māthavá āsa | sárvasvatyām. sá táta evá prāñ dáhann abhīyāyemám prthivīm. tám gótamaś ca rāhūganó videghás ca māthavāḥ paścād dáhantam ánvīyatuh. sá imáh sárva nadír átidadāha. sadānirēty úttarād girér nīrdhāvati. tám haivá nātidadāha. tám ha sma tám purá brāhmaṇá ná taranty. anátidagdāgnīnā vaiśvānaréñēti. || 15. táta etārhi | prācīnam bahávo brāhmaṇ«ās. tād dhákṣetratarām ivāsa srāvítaram ivāsvaditam agnīnā vaiśvānaréñēti. || 16. tād u haitārhi | kṣétratarām iva. brāhmaṇá u hí nūnám enad yajñáir ásiśvadamt. sápi jaghanyē naidāgbhé sám ivaivá kopayati. távac chītānatidagdāh hy ágnīnā vaiśvānaréna. || 17. sá hovāca | videghó māthavāḥ. kvāhám bhavanīty. áta evá te prācīnam bhūvanam iti hovāca. sāsī«āpy etārhi kosalavidehānām maryādā. te hí māthavāḥ. || 18. átha hovāca | gótamo rāhūganāḥ. kathám nú na āmantryāmāno ná prātyaśrausīr iti. sá hovācāgnīr me vaiśvānaró múkhe 'bhūt. sá nēn me múkhan nispádyātai. tasmāt te ná prātyaśrausam iti. || 19. tād u kathám abhūd iti. | yātraivá tvám ghṛtasnav imaha ity abhivyābhārsīs tād evá me ghṛtakirtáú agnīr vaiśvānaró múkhad údajvālīt. tám nāśakam dhārayitum. sá me múkhan nīrapādīti. ||*

— 以下略 —

## 2.1. Maitrāyaṇī Samhitā II 1,11:13,1-7

*vāmáde<sup>[2]</sup> vasya pañcadaśá sámidhenś ca syúr yājyānuvākyaś ca. vāmádevaś ca vai ku<sup>[3]</sup> sitáyī cājīm ayātām ātmanoh. sá kusitáyī vāmádevathásya<sup>[4]</sup> kúbaram achinat. sáparam nyáplavata. yugám vā chetsyámīśám véti. sō 'gnī<sup>[5]</sup> m úkhyam ávaiksata. sá etám mántram apaśyat. tám arcīr údausat. sárctīśā dabyámānā<sup>[6]</sup> bradám práviśat. sá vāvá kausitó bradó. ráksāmsi vai sá ténápabata.<sup>[7]</sup> tād ráksāmsy evaiténápabate.*

## 2.2. Kāṭhaka-Samhitā I 5:130,2-7

*vāmádevasyaitát pañcadaśám rakṣoghnám sámidhenyò bhavanti. vāmá<sup>[3]</sup> devaś ca vai kusidáyī cātmanor ājīm ayātām. tāsya kusidáyī púrvasyā<sup>[4]</sup> tidrutasya kúbaram nyāmṛṇat. sá dvitīyam upaparyāvartatēśám váksam vā chetsyā<sup>[5]</sup> mīti. sá vāmádeva úkhyam agnīm abibhas. tám ávaiksata. sá etát súktám apaśyat. kr<sup>[6]</sup> nuśvā pájāh prásitīm ná prthivīm iti. tám agnīr anūddrútya sámadabat. sá da<sup>[7]</sup> hyámānā bradám kausidám prámajjad. yád etád anūcyáte ráksasām dúṣtyai.*